ブロニスワフ・ピウスツキ研究の功績で井上紘一、沢田和彦両名誉教授に
ポーランド共和国文化功労章「グロリア・アルティス金メダル」授与

5月10日、五月三日憲法記念日に合わせて駐日ポーランド共和国大使館で開かれたパーティの席上、井上紘一教授は、日本公式訪問中のズビグニェフ・ラウポーランド共和国外務大臣ご臨席の下、パヴェウ・ミレフスキ駐日ポーランド共和国大使から、文化分野におけるポーランド最高位の勲章である「文化功労章グロリア・アルティス」金メダルを授けられました。（ポーランド広報文化センター）

ピルスツキアナ・ヤポニカ～受章スピーチ～

井上 紘一

壮年期に二度までも大きな戦争に巻き込まれ、己の生きざまに大幅の変更を強いられた人の不幸はさまざまであろう。リトワニア生まれの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ（1866～1918）は、37才で日露戦争、47才で第一次世界大戦に際会して、前者により己の家族との離別を余儀なくされ、後者は彼の仕事の完成を阻止した。とはいえ彼の悲劇は、19才の冬に露帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座して逮捕されたことに淵源する。さもなくば、彼が極東の一角に足を踏み入れるようなことは万が一にも出来せず、したがって、人類学者ピウスツキもその「サハリン民族誌」も、遺憾ながらなかったであろう。彼の北東アジア研究は、その悲劇的な生きざまの所産と見做すのが至当である（井上 2018: ix）。

私は「ブロニスワフ・ピウスツキに関する総合研究」を“Pilsudskiana”と命名するよう呼びかけている。そこで Pilsudskiana Japonica は日本発のピウスツキ研究を意味し、その嚆矢は1902年の初来日まで遡るものの、掛値なしの Pilsudskiana Japonica は、1980年代に日本で推進された「ピウスツキ蠟管音声再生をめぐる総合研究プロジェクト」で具現化された。同プロジェクト関連の刊行物には Alfred F. Majewicz 編『ピウスツキ著作集』（英文、1998～、全5巻中4巻まで既刊）、沢田和彦・井上紘一編『ピウスツキ評伝』（英文、2010）、井上紘一訳編『ピウスツキのサハリン民族誌』（邦文、2018）、沢田和彦著『ピウスツキ伝』（邦文、2019）などがある。

1985年の札幌における B・ピウスツキ国際会議を受けて、1991年には第2回がロシアで、第3回（1999）と第4回（2018）はポーランドで開催された。Pilsudskiana の研究網が整備される中で、ピウスツキの記念碑が（嚆矢は1991年ロシアのユジノサハリンスク、2013年の2号が日本の白老、2017年の3号がリトワニアのズーウフ、2018年の4号はポーランドのジョリにて）建立されてゆく。2013年10月19日、白老のアイヌ民族博物館（現国立アイヌ民族博物館、ウポポイ内）で除幕された第2号の「ブロンズ胸像」は、ポーランド政府が寄贈したものである。

Pilsudskiana Japonica の活動で広告塔を引き受けたのが、ピウスツキの孫にあたる木村和保さんである。彼は日本におけるピウスツキ家当主として国内外で取材に応じ、4度の国際会議でもその重責を全うされた。また祖父の弟ユゼフ・ピウスツキ元帥の孫たちとも家族ぐるみの交流を重ねた。ポーランドでは、ピウスツキ一族で最後の男系嗣子だった木村さんを Kazuyasu Kimura-Piłsudski と称することもあった。まことに残念ながら木村和保さんは昨年12月14日、67才の若さで急逝された。合掌。

この度の受勲は、Pilsudskiana Japonica にかかわるすべての方々へ向けられたものと理解し、私は彼らの名代としてこれを拝受する所存である。

（いのうえ・こういち、北海道大学名誉教授、会員）

=上写真=野本正博（ウポポイ=写真提供），井上，安藤，沢田

ブロニスワフ・ピウスツキ 105 回忌 ウポポイ 2023.5.17

白老・ウポポイの記念像前でのピウスツキ105回忌に会員三人が参加しました。今年は記念像の建立から十年目です。本州方面の猛暑が嘘のような、冷涼な気候の中、恒例のアイヌ古式舞踊披露の最後には、外国からの訪問客や一般参加者も加わって大きな輪踊りで盛り上がりました。（安藤厚）

ポーランド文化功労勲章「グロリア・アルティス金メダル」を受章して　沢田　和彦

2023 年 4 月 23 日～5 月 1 日、ポーランドとリトアニアへ出かけた。ポーランドで文化功労勲章の授章式に臨み受章講演を行い、ヴロツワフとリトアニアのヴィリニュスで講演を行うことが目的だった。

4月26日の昼、ワルシャワ郊外スレユヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館へガイドの車で向かった。ワルシャワ都心から南東へ20キロ、車で30分の距離である。2020年にスレユヴェクのピウスツキ家の屋敷に博物館の新館を建設して新たに開館したのである。

文化功労勲章「グロリア・アルティス」には金・銀・銅の3種類があり、金メダルはポーランドで最高の文化功労勲章であることを、恥ずかしながら私は授章式当日に知った。受章理由は、拙著『ブロニスワフ・ピウスツキ伝　〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人』(成文社2019)が2021年にポーランド語に翻訳・出版されて、長年のピウスツキ研究が評価されたことである。弟ユゼフは〈ポーランド建国の父〉と謳われたが、兄ブロニスワフは現在でも国内ではあまり知られていない。

さて授章式では最初にポーランド共和国副首相で文化・国家遺産大臣のピョトル・グリンスキ氏の挨拶があり、氏から私に勲章が授与された。

=右写真=副首相の授章式臨席は異例とのことだった。次いでポーランド科学アカデミーの長老ズビグニェフ・ヴイチク氏による賛辞(ラウダツャ)があった。氏は92歳だが、その演説は長時間に及んだ。その後、私が謝辞を述べた。

次に博物館の HP のブロニスワフ・ピウスツキ部門の英語版と日本語版の開始セレモニーが行われた。これまではポーランド語版しかなく、新たに英語版と日本語版を作成することになり、2022年に博物館の依頼で、ポーランド語から英語に訳した大量の原稿を、私が日本語に翻訳したのである。英語版はグリンスキ氏が、日本語版*は私が“Enter”をクリックし、これによって両語版がスタートした。

休憩後、私は「ブロニスワフ・ピウスツキと日本女性」というテーマで日本語で受章講演を行った。これは博物館からの提案によるもので、私の講演をバルバラ・スウォムカさんがポーランド語に通訳してくださった。彼女は他ならぬ拙著のポーランド語訳の翻訳者である。当日も見事な通訳ぶりだった。私はこの講演で、ピウスツキが日本滞在中に交流した女性として、民族学者の鳥居龍蔵の妻・鳥居きみ子、東京音楽学校の女流音楽家、藤井環(たまき、後の三浦環)と橘糸重(いとえ)、婦人運動家の福田英子、今井歌子、遠藤清(きよ)、東京女医学校校長の鷲山弥生(やよい)、日本女子大学校の学生たち、日露戦争時の松山のロシア人俘虜収容所の看護婦・宗宮幸子(そうみや・こうこ)、学習院女学部部長・下田歌子を取り上げた。

次いで同会場でワルシャワ大学東欧研究センター主催の「イースタン・レビュー賞」の授賞式が行われた。拙著のポーランド語訳が評価されて、2021年度の同賞(外国作品部門)を受賞したのである。まずセンター長ヤン・マリツキ氏から私に賞状の授与があった。そして旧知の友人アルフレッド・マイェヴィチ氏(ポズナン大学)が心のこもった賛辞を述べてくださった。最後に私が再度謝辞を述べた。当日はワルシャワの大学で日本語を学ぶ学生たちも来場していた。

かくして今回はわが人生最初で多分最後の VIP 待遇の旅となり、この日はわが生涯最良の日となった。

末筆ながら、東京のポーランド広報文化センター、ポーランド外務省、リトアニア駐在ポーランド大使館、ポーランド通信社、ワルシャワ大学東欧研究センター、ユゼフ・ピウスツキ博物館と副館長ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ氏、ヴロツワフのグロトフスキ研究所と所員プシェムィスワフ・ブワシュチャク氏に感謝の意を表する。　(さわだ・かずひこ、埼玉大学名誉教授)

ウポポイ開業三周年記念式典 *2023. 7. 8*

ピウスツキ忌のご縁で記念式典に招かれ、幻想的な伝統芸能を鑑賞し、併せて博物館の特別展示「“アウタリオピッタ”アイヌ文学の近代～バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市」6/24-8/20 も見学してきました。

皆様も一度ウポポイを訪ねてみては如何ですか。　(安藤厚)

=写真=式典の特別公演『イノミ』でフィナーレを飾った「イヨマンテ リムセ」(熊の霊送りの踊り)(ウポポイ提供)

* https://bronislawpilsudski.pl/ja/ホームページ/